ISSN 0915－5171

グリーントピックス

北海道立林業試験場　No.42

街路樹にとって受難の季節となりました

市街地に植栽された街路樹の傷害実態を目視により調査したところ、調査木の9割には外傷（外から見える傷や腐朽）があり、その主な原因は除排雪、草刈、剪定などの維持管理作業でした。

特に、積雪の多い地域では除排雪による外傷が多く発生することから、降雪初期、降雪中期、降雪終了後と時期別に、新しくついた外傷を調査しました。

街路樹1本当たりの外傷数は降雪初期では0.1個、降雪中期では0.3個、降雪終了後では1.5個と、除排雪作業（図－1－①）の回数が増えるごとに新しい外傷が増えました。外傷は毎年同じ場所に付く傾向が見られ、傷がふさがらないうちにまた傷つけられることで外傷が拡大し腐朽に至る例が多く見られました（図－1－②）。特に小径木では除排雪による外傷が大きく、支柱ごと傾くものも見られました（図－1－③）。なお、降雪終了後でも支柱のある路線では0.7個と外傷が半減する　方、支柱の7割に変形や折れ、傷が見られました（図－1－④）。また、店舗や駐車場、人家の出入り口では特に念入りに除排雪が行われる傾向があり、こうした場所においても外傷が増加していました。

除排雪にあたっては、降雪終了後に新しい傷が高い割合でついたことで腐朽に至っていることから、街路樹の管理者や道路管理者は当然ながら地域住民も街路樹を傷つけないよう十分配慮した作業を行う必要があります。

（管理技術科）

①　除排雪作業

②　外傷の連年発生による損傷の拡大

③　枝が折れ傾いた小径木・支柱

④　支柱の損傷

図－1　除排雪作業、外傷の症状、支柱の損傷